

図書館だより

号数 第24号
発行日 昭和48年11月1日
編集行 島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL (0852) 22-5725
印刷 (有)高浜印刷所



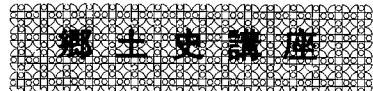
乱読の楽しみ

教師を長年勤めていたころは、読書の主体がしぜん研究の為のものとか、理論的のものに片よりもちだった。どうしても読まねばならないという必要に迫られての読書は、決して快適ではない。時にはむしろ苦痛でさえもあった。そうした職から解放されて時間にゆとりが出来てくると、以前からくすぶっていた乱読の楽しみが復活してきた。

辞書で乱読の項を引くと「手あたり次第に書物を読むこと」と出ている。精読とか味読、熟読というと、何か格調の高い、上品な読みぶりの印象を受けるが、乱読というと、無目的に何でもかんでも読むという下品な、およそ読書の範囲にはいらない感じを受ける。学校で読書指導をなさる先生で、乱読のすすめなどなさる方は、まずないと思う。

乱読と言えば、ひまつぶしの読みと取られてもいたしかたない。事実現在の私は、自然科学だろうが文学だろうが、とにかく好奇心に駆られたものを安直にとりあげる。いま、過去に読んだ書名のいくつかを問われても、即座に挙げることの出来るものは十指にも満たないであろう。何を求めて読むかなどの詮議は私には当てはまらないようだ。好きな人が団碁や麻雀に興ずるように、私の今の読書は楽しみのためというのに尽きる。せめて多読というならば、精魂こめてたくさんの事を読むことにならうが、私の乱読となると、読んだあと、たちまちその内容を忘却してしまうのがほとんどなのだから、話にならぬ。まさに乱読の弊の典型である。これからも余暇のある限り私の乱読の乱脈は乱脈を極めることであろう。

菊池寛の「読書は乱読にしかず。乱読以外の読書は、同じ読書でも一つの労働である」と言ったことばに、私は我が意を得た思いでいる。 津田公民館運営協議会委員 宮田朝海



匹見町の歴史

益田市文化財専門委員

矢富 熊一郎

美濃郡匹見町は、全国でも指折りに、数えられるほどの、過疎の地とされている。けれどもこれは、今日は急激に、世相が変って來たので、従来はそれほどでもなく、山間の僻地は僻地なりに、それ相等の人口を抱え、土地相等の生産を上げて、我慢強く生きて來たのである。

従来匹見町における、主要な産業を挙げて見ても、江戸時代からすでに、石見半紙、^{たたら}鉱山業、木地などの産業があつて、貧しいなりにも、安住の地として、地民は生活を立てて來たのである。

石見半紙は伝説によると、慶安年中匹見西村の住民、斎藤六左衛門が、防州山代郷、宇佐村の浪人、広兼次郎兵衛、同又兵衛の父子が、製紙に熟達しておること聞きこみ、当地

に二人を引入れたところ、幸にこの地が、その材料とする、楮の栽培にも適地であったので、次郎兵衛の心を動かし、いよいよこれが生産に努めさせた。^{やする}これは承応年間浜田藩主松平康映の時代で、藩内に起った、この産業を大いに喜び、御用紙漉を次郎兵衛に仰せつけ、町を擧げてさかんに増紙に精出させたので、幾ほどもなく石見半紙としての、声価を全国に挙げ、次第に発展して、遂には藩の御買上げ紙となり、町民にとり、町内第一の生産品として発展し、町民の懷を湿した。^{すきかみ}漉紙に関連して、楮の栽培も新たに畠地の畦を利用して盛に行つた。

次に町の繁栄をもたらしたものは、益田住藤井氏が經營した、鉱事業であった。これは匹見町内の全域にわたる、木材の生産地であるため、このおびただしい木材の、生産を認めた藤井氏は、那賀郡井

野村から、産出する砂鉄に目を付け、この砂鉄を駄馬に乗せ、はるばると道川にもたらし、鉱事業を大々的におこし、これに要する製炭事業を起し、且つ製鉄をさせた。

^{すぐてつ} 鋳鉄や鍊鉄を馬の背に載せて、はるばると益田に運搬させ、多額の収利を得させ、一面牛馬を飼わせ、且つ草鞋の生産などに、補助を与えて地民を賑わせた。製鉄は、特定の山配、大工、左下、吹差し・山子、番子等、一定の技師の手に依るのであるが、その他の製炭や鉄の運搬は、町民の力を借りたので、製鉄事業の盛行は、全町を賑し、町民の懷を肥した。

次に挙げるものに、木地の製産があった。これは全国の山々を渡り歩く木地師が、ロクロを廻し、椀や盆を生産したのであるが、これが長浜への運搬や、宮島へ送る宮島拘子の販売は、町の人手を要し、相当の収利を挙げていた。この他亀井谷の銅山が開発

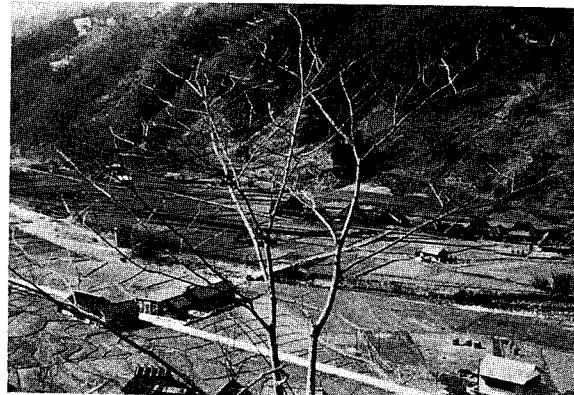
され、間夫として銅を堀り出した坑夫もいた。この銅鉱は、安芸の国加計の熔鉢炉に運搬するなど、相当の働き口があつて町内を湿した。

以上は当町民に取り、三大工業として、繁栄させたものであるが、その他手工業として、コウラ蓑の生産があつた。

これは林中の下草である、コウラといふ一種の茅を採取し、主として道川でコウラ蓑を作り、界隈に売捌いたが、時にはこの茅を、石見国内は勿論、隣国安芸国田戸の辺まで、売捌いて収利を得ていた。

その他農業の生産としては、コンニャク芋、ワサビ、椎茸、蕨のセンがあり、植林として鉄道の枕木出荷等、僻地なりに多大の副業による、資源を有したが、最近数年この方、急に僻地過疎の町として転落してしまった。

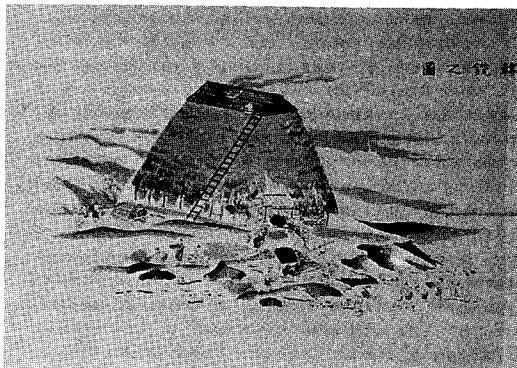
思うにかほどまで、生産に努めた石見半紙は、機械化による西洋紙に圧倒されて、手漉きの製産を止め、鉱山事業も九州に八幡製鉄所が出現し、機械化による洋鉄の生産におされて駄目となり、斧鉄の山として、無尽蔵を誇った大森林も、伐採つくされ、その他の農産手工業も、新案の工業製品のため、見



石見半紙の發祥地紙祖

棄てられ、僻地の産業はことごとく閉され、生活の困窮を著しく逼迫させ、僻地の生活苦をひしひしと痛感させ、都市の繁栄との落差を益々大きくさせて来た。

特に、この部落に決定的に打撃を与えたのは、昭和38年1月24日前後の豪雪であった。この豪雪のため、全く閉された全部落は孤立無援となり、不安にかられた町民の間には、早くも住み馴れた郷里に見切りをつけ、都市へ移ろうとする気分を抱かせる。特に、外部から閉された交通の不便は、益々都市と



匹見 道川の鉱業

の間に文化の格差を生じて来た。中でも芋原、広見、道川の諸部落の都市への進出は著しく、在所に痛ましい廃屋を見せて人煙を絶って、全国でも過疎の地として烙印を捺される町となり果てた。今日では町のセンターに色々と文化生活の施設をし、ここに住民を集結し、町民の不満を防止しようとする当局の苦慮を外に、益々日を追うて過疎の傾向を深めようとしている。

匹見の民族はその昔、和泉の国に繁衍した櫛代族が益田市の海岸部に集結したが、人口の増加に伴い、一部は匹見川を伝って上流にさか上ったもので、同町の和又からは、古墳時代のカラスキを発掘しておるほどで、文化水準は比較的早く、古墳もいくつか存在している。特に江戸時代においては、安芸国の方面から秀浦、栗栖、竹田、三好、山崎、坂本の諸氏の移住もあって山陽方面の交渉も深く特に、匹見町奥部の広見のごときは、安芸の吉和と婚姻を結んでいた。そして僻地なりに発展して來たが、今日では都市との文化が著しく較差を生じ日毎に荒廃の兆を来し、すでに僻地化の運命をたどったことは、いかにも心苦しい次第である。

郷土史こぼれ話

針は細くても呑まれず

江戸時代の中ごろ書かれた『雲陽秘事記』という珍本がある。その中に載っている話である。

松江藩六代松平宗衍は、大男が好きで、御駕籠の者にいたるまで、渡り者のあばれ者を集めていた。宗衍が松江に帰国しているときは、駕籠かきどもは外中原宮ノ丁にあった御駕籠部屋に住んでいた。彼らならず者は、夏になると土橋の上で夕涼みをし、往来の人々に乱暴を働いた。土橋とは交融橋のことであろう。

或るとき、坪坂安右衛門という小兵の武士が、所要のため夜に入って土橋を渡ろうとした。案の定、例のあぶれ者の大男たちが、橋の両側に腰かけ、両方より足をのばして通れないようにしていた。

「お前たちは何故かかる狼藉をするのか。早く道をあけて通せ」

「小武士なにを吐かす。おれたちを一体誰と思うか。お殿様の御駕の者なることを知らぬか。くずくず吐かせば一つまみにしてくれよう」

小山のような男5、6人は、やにわに安右衛門に襲いかかった。安右衛門はいたって小男だったので、簡単にひねられるように思われた。だが、先頭の熊の如き大男は、もんどり打って橋上より水の中へ投げとばされた。

「小猿な！」

残り5人は野獸のような唸り声をあげて、一度にかかってきた。安右衛門はなんの苦もなく将棋倒しに押したおし、投げとばした。驚いた大男たちは、最初の元気はどこへやら、雲の子を散らすように逃げていった。それからは御駕籠の者が土橋へ出て乱暴することはなくなった。

「針は細くても呑まれず」というが、出雲の武士は小さくとも馬鹿んならぬわい」

江戸へ帰った駕籠かきたちは、口々にこう云つたという。

+++++ 郷 土 資 料 紹 介 +++++

島根郷土資料刊行会刊 +++++

★雲陽軍実記

島根県地方の戦国時代をいとどるのは、なんといっても尼子毛利の激戦であろう。戦いの様子は勿論だが、その中で活躍する尼子経久や山中鹿介などの郷土の武将らの人間像は、私たちの興味をひきつけてやまない。

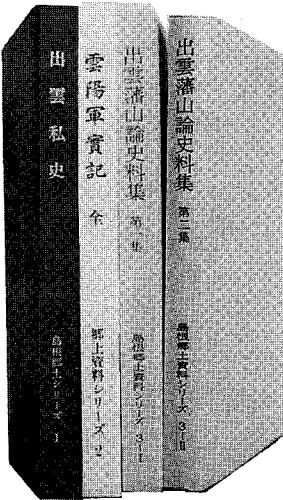
ところで、尼子毛利の熾烈な戦闘や武将たちのことば、なににかいてあるだろうか。そのほとんどは、近世に入ってから成立した。雲陽軍実記、陰徳太平記、吉田物語、安西軍策、雲州軍話などの、いわゆる軍記物に載っているのである。軍記物は物語性を重視するから、筋を面白くするために、作者によってかなり潤色されているのは止むをえない。詳しさと面白さでは断然陰徳太平記である。しかし、簡潔ながら比較的史実に忠実である点では、雲陽軍実記が第一等である。

雲陽軍実記は序文によると尼子晴久の臣河本隆政によって天正八年（1580）に書かれたもので、右にあげた諸軍書の中でもっとも早く成立している。隆政は尼子晴久に従って安芸の毛利を攻め、陶隆房の軍勢と戦って足に深手を負い、それ以後戦列から離れて富田城麓に閑居していたという。従って尼子毛利の戦いを自ら体験し、自分の目で見ていたわけで、その点で他の軍記物より信憑性は高いといえよう。

今度、島根郷土資料刊行会から雲陽軍実記が覆刻出版された（価格1,000円）。残念ながら原本はのこっていないが、明治44年松陽新報社出版のものを底本としており、各種写本の中でも、もっとも原本に近いものである。今日われわれが伝聞する尼子合戦譚は、かなり後世の紛飾が強いが、それを正す意味でも、是非本書の一読をすすめたい。

なおこの書を現代語に訳した「新雲陽軍実記」（広瀬町役場刊）が、妹尾豊三郎氏の努力で出版された。併せ一読をおすすめする。

★出雲藩山論史料集



昨年、県警本部から県立図書館が寄託をうけた、「松江藩御徒関係記録、文書」の中に含まれていた文書群の一つに、山論関係の纏ったものが多くあった。これは旧藩時代、島根半島の各所に頻発した入会草山の差縫関係を刻明に物語る藩庁一島根県一警察本部一に残された記録、文書であった。島根郷土資料刊行会は、他の文書群にさきがけでまずこの関係の解説、出版を急いだ。これが、「出雲藩山論史料集、島根郷土資料シリーズ3」である。この「シリーズ3」は、

- 「3-I」(1)鳴根郡森山村と伯州浜之目7ヶ村紫草山差縫関係史料
- (2)鳴根郡下宇部尾村と意宇郡大根嶋7ヶ村草山差縫関係史料
- 「3-II」鳴根郡邑生・別所両村草刈山之儀に付枕木山花藏寺との差縫関係史料
- 「3-III」(1)鳴根郡三講武村入相山差縫関係史料
(2)秋鹿郡古浦。秋鹿村山論関係史料
(12月発刊予定)

の三冊にわけて、論争地点ごとに収録してある。

山論関係資料は、すでに全国的にもいくつか発表されている。しかし今回のように一地域に纏つたものとして発見され、その解説書が発刊されたのは珍らしいことであろう。入会山の差縫一山論一の研究は、旧藩時代の打落経済に関する好個の研究資料であるばかりでなく、近世林政史、法制史研究の資料としても大切な文献資料である。この「シリーズ3」を通読することによって、当時の中央から離れた出雲地方での農山漁村の実状を知ることに役立つものとしておすすめする。各冊とも、A5判、250頁前後、3百部の限定出版、2,500円～2,700円である。

島根郷土資料刊行会事務局

県立図書館内

著書と私（その1）

「三瓶山の史話」

石村 穎久

自費で昭和42年7月に発刊、いまは手もとに一冊しかなく、私にとっても「まぼろしの本」になってしまった。

大田市民にとって三瓶山は、生活の一部分になっているほど親しいのに、ふしげに山の歴史や昔ばなしなどまとめた本がない。ここに住みついで、三瓶を語る系図がないことはさびしいことだし、郷土を愛するのには歴史を知ることが大切だと、まとめてみる気になった。資料らしいものもなく、あっても年号や内容のあやふやなものばかりだった。たくさんな人にも接触し、少しずつ積みあげて一冊になるのに6年くらいかかった。

内容は一部（山の史話）二部（山の風土記）にわけ、一部では山の成り立ちから、国立公園に編入されるまでを、二部では山ろくにある小さなほこらにまつってある神様や動物や植物をめぐるエピソード、土地の名前の歴史、三瓶山の解説などを書いた。表紙は若草色とし、題字は独立書人団会員、故・岸田大江さんの筆、靈氣を感じる書体は、いまも本をみつめるときびしく迫ってくる。まとめた原稿は俳句誌「地帶」の副主幹、松井立浪さんにあずけて編集してもらった。A4判12枚、200ページ。

書いていて興味が深かったのは三瓶山の古名「サヒメ」にまつわる種姫物語。また陸軍演習地のころの兵隊さんたちの哀歎などだった。那須与市の子孫が三瓶山に漂着していたという伝説の出處をめぐって、子孫の追跡調査もしてつづけた。風土記では天然スギや高原の草花、ワサビ、ニジマス、放牧牛などについて、エピソードや分布の実態。歴史などを追っかけ、本当に楽しかった。楽しんで書いたせいか、大田市では唯一つの資料として活用しているほか「本はありませんか」という問合せが、いまも盛んにあって困っているし「喜んで読んでいます」とハガキをよせる人もたびたび。ただ一冊の本なのに、いつまでも人に喜んでもらうことは何としても楽しい。

（郷土史研究・大田市大田町）

著書と私（その2）

詩集「水に記す哀歌」

広島女学院大学文学部教授
宍道 達

最近私は詩集「水に記す哀歌」を中央公論事業出版から4百部限定出版した。書店には出ず、私の手許にだけあるが、相当費用をかけたので売れなくては困る。読み返してみると松江を歌ったり、松江を背景にした作が意外に多いので自分ながら驚いたりしている。幾人かの方々から懇意なお言葉を頂いていることは望外の喜びである。

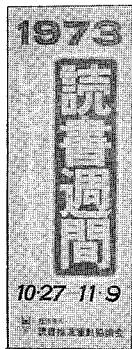
少年時代から詩を書いて来たが、老年になって浪漫的感傷の抒情詩集を出したについては序文に記したので読んで下さればよい。簡単に再録できるものでないし、また内容を一々説明できるものでもない。

古今集、新古今集の古典的憂鬱から近代の憂鬱まで、人間内部の憂鬱は複雑な曲線的表出を要求していて、万葉集のような直線的抒情とは様相を異にしている。今日抒情といえば、普通限定された意味では、やはり内心の人間的憂うつ苦悶をうたうことであるが、そんな詩集を出版したことは、つまり、ふと魔がさして恥をさらすことになったというものである。

詩—文学は怖るべき魔物で、これに取りつかれたら最後一生その呪縛から脱れられない。そうでない人は立身出世や金儲けや権勢獲得に懸命になることができて幸せだろうが、詩など書く者は愚にもつかぬ人間で、それが人生似幻花と咲いたり、虚妄のみが真実などと思ったりするのでは、とても並の人間ではないのだろう。

本来、文学及び文学に携わる者の精神の根柢には反逆精神があるべきで、それのないものはフヤケている。その精神は社会や人間や自己自身への批判と脈絡し、その表出は直接直線的なもの、迂余曲折複雑なもの、感傷的なもの、浪漫的なもの、様々である。バイロンは一般には甘い恋愛詩人といはれるが、実は彼の魂は烈しい反逆精神に燃えていたのであった。孤高といい、虚無をいい、あるいはまた感傷というとも、その精神の表出の一姿勢であることを見極めることが肝要であろう。

（松江市新潟賀町1492 TEL松江23-2044）



☆ レジャーを本で ☆



— 第27回読書週間 —

10月27日—11月9日

読書週間にについて

昭和22年の秋、荒廃した国土と、混乱した世相のなかに、一筋の光を投げかけることができるならばと、第1回読書週間は実施されました。図書館界と出版界の総意により、当時の読書週間の実行委員会が主催したものです。

それから20数年、わが国の経済の発展とともに、国民生活の向上とともに、読書週間も、恒例の秋の国民的行事として、定着をみるに至りました。はやいもので今年は第27回です。

全国の公共図書館、公民館、小・中・高校などが、この週間に機会に、読書の普及をより推進するため、多彩な運動と、地域に即した行事、広報活動を展開します。また、新聞・テレビ・ラジオなど、マスコミ界も、あるいは特別番組の放送によって、読書週間への協力的支援をつづけ、年ごとに活発になってきています。

国民の文化水準の上昇にもかかわらず、いよいよ混迷する社会情勢を考えるとき、論理的思考の基礎となる読書の重要性は、いまさらいうまでもありません。読書週間が、国民ひとりひとりの、読書への関心と、読書生活への反省の、契機となることを願っています。

栄の『読書推進賞』に 温泉津町の井田秀子氏決る！

社団法人読書推進運動協議会では、読書推進運動に功績のある個人および団体を顕彰するために、昭和46年度より『読書推進賞』を設定しました。

本年度の受賞者の一人は、温泉津町井田、元井田読書会の井田秀子氏が本県ではじめて選ばれました。

元井田読書会の活動については、既に当館で読書普及映画「虹」に収録広く紹介しているところであります。氏はこの読書会のリーダーとして実に20数年間献身的な努力を払われ、今回その功績が認められたもので心から祝福すると共に、これを機会に本県の読書運動が一層活発になることを期待してやみません。

読書週間応援歌

— 地域における読書活動 —

邑智町社会教育主事

藤田富士夫

読書活動はいうまでもなく、個人の読書からはじまる。個人読書から集団読書への発展、そこには違った限りない読書の力が成生し生活を大きく変えていく。ここに読書のもつ大きな意義がある。

私は昨年10月～11月にかけて文部省から派遣されヨーロッパ諸国社会教育視察旅行をしたとき、イギリスのレスターで体験したこと。それは、街の書店に行ったとき、ちょうど若い母親（23～4才位）が幼児の本（BEST, WORD, BOOK）を買い求めていたので話

しかけてみた。この若い母親の家庭には子どものための図書コーナー、夫婦専用図書コーナーをつくり、自由に手軽く本がみられ、家族で読書ができ、親子のだんらんができるて楽しいこと、また、悩みや、わからぬことがらを明らかにすることもできる。……とのことであった。美しい母親は次女（4才）に本を買っていたのであるが、子供に適する本を選択しあたえてやらねばならないし、これが私の役目です……と言っていた。またそのためには親として選択できる能力をつけるため親自身勉強しなくてはなりません……と。また書店内は読者の年令、職業などを考慮してコーナーがつくられ、図書が選択し易いようにはかられていた。特に感心したのは書店に読者に対して専門に相談指導のできる人を雇っていたことである。

私達の住む地域において読書活動を進める上で大切なことは、環境を整備すること、これには、図書館の施設設備の充実（特に身体障害者が気軽に利用できるように配慮）、読書グループの育成、巡回図書館の活動促進、また家庭においても読書環境の整備など是非実践したいものである。

今日、社会教育の面からもとと進めなければならないものに校庭開放事業がある。この事業で読書活動をとりあげ図書の充実と一定の指導員のもとに学校施設特に、図書室を地域の子供達に開放し読書活動を通じて健全育成をはかろうとするものである。この活動が県下各市町村で積極的にとりあげられ小学校単位に開放が進められるならば飛躍的な読書活動が期待される——子ども達は本を求めている。この要求にこたえてやるためにあらゆる配慮が必要である。

県下町村の現状は図書館のない地域、書店すらない地域がどれほど多いのか、また家庭にあっても親が子に対する読書習慣の指導力、理解などの不足、こうした生活環境が整備されてないことは地域住民の生活の中に読書が生かされてないと言えるのであろう。変りゆく社会にあって私達はもって精神的豊かさをもち余暇の発見と読書への活用をもっと積極的に実践しなくてはならない。秋の読書週間をむかえて私達は生涯教育の観点に立って真剣に考えなければならない問題である。

— こどもの読書 —

温泉津町立湯里小学校教頭

・山 本 清 助

われおさなき

「予幼より読書を好み、家貧しくして書に乏し」

大田南畝（1749～1823、寛延2～文政6）のことばです。家貧しき読書家の切実な嘆きのことばとして、強く訴えていることが私たちの胸にジーンとります。この人は職務に勤勉な幕吏であると共に、驚くべき広範な学識をもった文人で、狂歌や狂詩・洒落本・滑稽本をはじめ隨筆まで幅の広い活動をしていて、蜀山人の号をもつ有名人です。ある人の書には当時幕府の蔵書が16万部あった頃、南畝は2万冊もあったと伝えています。

南畝は幼少の頃より、読書を好み、できるかぎり書物も買いました。時には人に借りては読み、ある時には借りた本を写しとて何回も読んでいます。「少より老に至るまで書を抄して倦まず」と、いつていますが決して自慢したことではありません。それほどまでに彼はきわめて熱心な愛読家であり、書写した本は4百巻もあったと伝えられています。また身にこたえる難儀をして書物を手に入れていますから、書物は誠に大切に致しました。

私は、この立派な先輩の読書を大切にする心を学びとることを強く感じます。現在書物は多くあり子どもは読書の目的、書物の扱い方、読書感想文の書き方、書物の借り方、買い方等「かたち」としてはひととおり知っているが、書物に対する子どもの姿勢と心(感謝)といった「読書を大切にする」ことについて、何か足りないものを感じます。書物の中に真理はないかも知れないが、読書によって年令相応な真理の探究はでき、そのことが読書を大切にするようになると思います。このことが宋（中国）の王安石の言う「貧者は書によりて富み、富者は書によりて貴し」にあたるのではないかと思います。

読書週間に当り、子どもに読書のさせ方について反省してみたいものです。

読書と視聴覚

県立図書館視聴覚係長

安達 広義

このごろ人間は、テレビの普及によってあまり読書をしなくなったとか、感覚的に事象を受けとめて論理的判断をしなくなつたとか、あるいは思考力が弱くなつたとか、いろいろなことがとりさたされているようである。中には、テレビこそ読書の敵であると広言してはばかならぬ人もいるようだ。

しかし、これは、きわめて狭量な危険な思想と言わねばならない。

これらの人たちは、われわれ人間が心から楽しんだり、役に立つことを身につけ、学んだりする手段として、読書が唯一のものであり、しかも最もすぐれたものだとひとり合点をしているのに気がつかない。

われわれが楽しんだり、学んだりする手段としては、読書やテレビのほかに、さまざまなものがあり、さまざまな経験を経て、それらを自分自身で思考を組み立て、抽象し、概念を形成することによって成り立つのである。

活字やテレビは、それぞれ特性があり、ある場合には活字媒体が視聴覚媒体にまさる場合もあるし、またその逆な場合もあり得るのであって、決して、

どちらがまさるとはいえないものである。

また、この両者が、うまく結合されると、両者を加えたものより数倍の効果を発揮されることもあり得るから妙である。

現代の人間は、もはや、活字媒体だけではとうてい生きていくことはできない。かといって活字媒体を排除して視聴覚媒体のみに頼ることも不可能である。

写真の全くない新聞や雑誌はとうてい考えられなし、音楽や語学、生物の生態、動きを伴ったものを知り、学ぶ場合、視聴覚媒体は欠くことのできない要素である。

図書館には、ただ単に書物だけ置いてあるというのはナンセンスである。

音楽、語学を学ぶには活字とともにレコードやテープが、歴史を学ぶには当時のナマの録音が、すなれゆく郷土民俗芸能の保存資料は書物のほかに視聴覚資料がなくてはならないものである。

幸いにも島根県立図書館には視聴覚係があり、映画フィルム、スライド、レコード、ビデオ教材、録音教材も年々充実されつつある。全国の都道府県立図書館でも、これだけ視聴覚を重視した図書館は数少ないものであり、この意味において先進図書館として誇ってよいと思う。

県民の皆さん、そして社会教育、学校教育関係の皆さんのご利用を心からお待ちしています。

善意図書

この図書館だより第16号（昭和47.1.1日付）に当館速水館長の提唱で始まった善意図書運動（慶弔の返えしに本を）は、その後次々によせられ、多くの方々に利用されています。

ご寄贈いただいた方々をこの紙上にご紹介し感謝の意を表します。

金川 義弘（松江市）The American

Peoples Encyclopedia 20冊
梶川礼悦郎（松江市）日本戯曲全集等
61冊

並河 萬里（東京都）オリエントの文化遺産等 6冊

深田 春明（松江市）ギリシャの美術等26冊
大塚 哲也（八束郡）リハビリテーション入門等11冊
福井貴美子（松江市）母をたずねて三千里等20冊
音羽 融（松江市）全集日本の歴史等33冊



一色 功（松江市）会計学辞典等94冊
橋本 義（松江市）西洋教育史概説等29冊

藤沢 秀晴（出雲市）島根教育92冊
桃 裕行（東京都）出雲私史等マイ
クロフィルム 9巻
木村ヤス子（松江市）農業気象学等
110冊

上記の外多くの方々からご寄贈いた
だいています。ありがとうございました。

善意によってよせられたこれらの本
は当館の資料として受入れ、寄贈者の氏名を刻印し、
広く県民の利用に供し、この善意を長く生かし続け
て行きます。

皆様の善意が、お近くの公共図書館あるいは公民
館図書室、学校図書館にも及ぶようお願いいたします。